

Title: Purification of water Mechanism of "TOKYO WATER"

[タイトル] IST サイエンスモジュール 城東地区「東京水プログラム」活動報告書

[日時]

現地滞在期間：2015年7月25日（土）～8月9日（日）

プログラム実施期間：2015年7月30日（木）～8月7日（金）

[場所]

23WSJサイト（山口県山口市阿知須きらら浜）サイエンスモジュール

[運営スタッフ]

橋本吉晴（城東地区、全日程）、小林潤平（城東地区、全日程）、秋庭慧佑（大都心地区、後半）
Brynjar Bragason（アイスランド、全日程）、Anita Rut Gunnarsdottir（アイスランド全日程）、
柿沼謙吾（城東地区、東京からの後方支援）

[目的]

世界のスカウト達に東京の高度な浄水システムのしくみと「東京水」の安全性、品質の高さを説明し、簡単なろ過装置を作ってる過の基本原理を体験させる。最後に、安全で品質の高い水を得るためには高度な浄水システムを導入するだけでなく、キャンプへ行った時や日常生活の中でもちょっとした気配りやマナーを守り、自然を大切にすることが何よりも重要だということを訴え、日々の活動に落とし込んでもらうことを目的とする。

[結果]

以下に活動結果と所感を記載する。

・7月25日（土）

現地到着。IST全体トレーニングを受講。その後自分が野営するテント設営。

・7月26日（日）

午前ISTサイエンスモジュール説明会。しかし翌日の集合時間を聞いただけで終わる。自分たちのブースの場所について説明がなかった。できればもう少し具体的な説明が欲しかった。

午後は日本人スタッフでプログラム準備打合せ。

・7月27日（月）

自分たちのブースが決定。東京水プログラムをアシストしてくれる外国人IST2名も決定。

東京から送った物資が届くまではサイトの草むしり実施。午後、資材が届いたのでサイトへ搬入。

・7月28日（火）

掲示パネル設置、ろ過実験の材料準備。特に活性炭の洗浄・乾燥に時間がかかるため、段取りを決め、全員で順序良く作業実施。作業指示にはホワイトボードを使用し、掲示し、手順に間違いのないようにした。

・7月29日（水）

前日に引き続き活性炭の洗浄・乾燥作業を実施。乾燥中はアイスランドスタッフに実際にろ過実験を試してもらい、段取りと注意事項を覚えてもらった。

・7月30日(木)

プログラム初日。スペースの制限から午前2回x2グループ、午後2回x2グループの1日8グループに対応することとした。記念すべき第1回目の受講者はメキシコとオーストリア、2回目はUKと韓国、3回目はベルギーとスUK、4回目はギリシャとマラウイとフランス。

韓国グループは英語が通じていなかった印象。UK、フランスは下手な英語の講義に退屈そうにしていた。実験はおおむね楽しんでくれているようだったが、ろ過がうまくいかなかったフランスのグループは不機嫌に。スタッフでフィードバック会議を実施し、試飲用の東京水がぬるくて不評のため、氷で冷やす、ろ過フィルタの詰め方指導強化、実験後の講義は聞かないので、実験を最後にするなど、改善項目が挙がった。

・7月31日(金)

この日はサイエンスプログラムは休み

・8月1日(土)

1回目はフィンランドと韓国、2回目はスペインと少人数のアイスランド、ノルウェー、香港。3回目は台湾とアイスランド、4回目は2組とも東京。初めて日本人が受講に来たが、英語が通じない。そこで日本語を交えて対応した。

・8月2日(日)

フードフェスティバルのためサイエンスプログラムは休み

・8月3日(月)

1回目はUK、フィンランド、2回目はインドネシアとアルジェリア、3回目はカンボジアとオーストラリア、4回目は日本と韓国。プログラムの合間に各国の敬礼を見せてもらったが、三指の敬礼をしている国はカンボジアくらいで、インドネシアは軍隊のような敬礼。ヨーロッパは特になかった。アイスランドスタッフに聞くと国旗掲揚時のみ旗を三指で追いかけるのだそう。三指の敬礼が世界共通の動作だと思っていたので意外だった。敬礼を見せてというもみんな嫌がるのでこの日だけにしたが、一度世界のボーイスカウトの基本動作を調査してみたい。

プログラムの合間に他のブースを見学した。看板が目立つところ、記念品がもらえるところや短時間で体験できるところはにぎわっていた。次回の参考にしたい。

・8月4日(火)

1回目はドイツと日本、2回目は日本とスリナム、3回目は日本、4回目はオランダとドイツ。少し余裕が出てきたため、この日からスタッフ5人中1人は半日休暇がとれるようにして講師もローテーションとした。他のスタッフも説明のポイントをいつのまにか覚えていて、なかなかうまくやってくれるので関心した。

・8月5日(水)

物資が余り勝手になってきたのでこの日から1日5回とした。1回目はロシア、タイ、スウェーデン、2回目はUKと日本、3回目はドイツ、4回目は日本とチュニジア、5回目は日本。私が半日休暇をもらった日であったが他のスタッフで大人数に対応してくれていたのもしかった。

・8月6日(木)

いよいよ最終日、1回目はフィンランドとブラジル、2回目はポーランドとUK、3回目はコロンビアとUK、4回目はUKと日本、5回目は日本とスウェーデン。スタッフ全員で打ち上げの食事会をしたが、なかなかいいチームワークになったところで終わるのは名残惜しかった。

・8月7日(金)

予備日として急きょ午前中だけブースをオープンすることとなった。しかしマグカップをつくるブースだけに行列ができ、他のブースには人がこなかった。途中で見切りをつけてブースのかたづけ実施。プログラムスタッフと最後のあいさつを交わし、プログラム終了。最後にサイエンスモジュールのISTチーム全員で記念撮影。

・8月8日(土)

ゴミ捨て場の応援。大量の残飯を目にする。まだ食べられるもの、使えるものがあるので仕分けをして、欲しい人に配りたいと思ったが、次から次へと運ばれてくるゴミのために時間が割けない。3万人もの人が居住する町では仕方ないのかなと思いつつ、ただひたすらに作業を続けた。食べられるものはゴミ捨て場に来る前にキャンプサイトを回収してまわるようなしくみがあればと思った。

・8月9日(日)

居住テントを片付け帰国。

[所感]

まず、全体を通してあらゆることに情報が少ないと感じた。知ってそうな人を見つけて尋ねても、「知らない」、「聞いてない」とイライラして怒られる始末。当然あるべきものがなくても訴える先がわからない、マナー違反を見つけても通報する先がわからないなどなど、前半の期間は多くのスタッフがいろんな不満、ストレスを持っていたと思う。大人はそのうちいい加減にやりはじめるが、正義感の強い若者達の不満大きかったように感じた。その後口コミ等で情報が回るようになり、改善はされていったが、災害時のボランティアも似たような状況なのかなと考えさせられた。また、もう一つ学んだのは「ボランティア」が自分の許容を超えた「義務」になってくると、人は逃げだすということ。割り当ての人数が少ないところほど、一人の負担が大きくなり、人が減り、サービスがどんどん低下していく。ボランティアにとって大切なことは一人の負担を減らしてあげることだと普段のボーイスカウト活動でも感じていたことだが、ジャンボリーにくるとなおのこと実感した。

プログラムの中では毎日フィードバック会議を実施した。普段会社でも実施していることだが、ホワイトボードを使った会議でスタッフ達がどんどんいい意見を出してくる。まだ学生のスタッフ達が私のやり方を見て、将来職場等で真似してくれるとうれしいなと思って一番力を入れたところである。

日本の派遣隊に思ったことは、英語を聞こうとしないこと。なるべくわかりやすく話したつもりだが、なんで日本人が英語で話しているのと言わんばかり。せっかく世界ジャンボリーに来ているのだからと思い、少し日本語を交えながらも英語にはこだわった。ただ、プログラム修了のサインはアイスランド人スタッフから欲しがるのはかわいいところ。外国人に対する興味はあるのだから、もっともっと英語を覚えて、さほど英語がうまくなるとも積極的にコミュニケーションをとれるようになってほしいと感じた。

セレモニーやアリーナショーではいろいろと面白いことが起こった。まずはアリーナへの行進。誰かが歌を歌い始める。そうすると歌が大合唱になる。誰かが掛け声をかける。そうするとみんながそれに答える。楽器がなりだせば踊りだす、アリーナへの行進はいつも高揚感を覚えて、ショーを見るよりも楽しいものだった。たいくつなスピーチでは「ジャンボリー」という単語が出ると一斉に会場が「Jamboree!」と返す。「和」という単語が出ると「WA!」と返す。誰が言い始めたかわからないが、いつのまにかスピーチが楽しいものになってくる。誰もそれをたしなめたりしない。ノリのいい曲がながれるとそのうち近くの人の肩を持ってどんどんつながり、ぐるぐると練り歩くのがはやりだす。列はどんどん長くなり、最初はためらってたひとも、つながればみんな笑顔になる。大人も子供も一緒になって遊ぶ。これはボーイスカウトならではの楽しみだろうか。そういう「遊び心」こそが世界のボーイスカウトの共通言語なんじゃないだろうかと思えた。

ジャンボリーも終盤になってくると、やっと解放されるというすがすがしい思いと、やっとの思いで築きあげたものが突如なくなってしまうという寂しく空しい思いが交錯した。3万人もの町が突然現れ消えていく。これが世界ジャンボリーなんだとその時しみじみと感じたのを思い出す。その夢のような光景を目の当たりにしたこと、体験したこと、感動したことは思い出すたびに今でも身震いがする思いである。

最後に、第23回世界ジャンボリーに行かせていただいた城東地区のみなさん、東京連盟のみなさん、日本連盟のみなさん、事前準備や不足品の調達など東京から支援してくださった柿沼謙吾さん、ともに事前準備をし、現地でもよくがんばってくれた日本人スタッフの小林潤平さんと秋庭慧佑さん、アイスランド人なのに「東京水」のプログラムをよく理解して熱心に協力してくれたアイスランド人スタッフのブリニアとアニータ、現地でもともに汗を流し声をかけあった城東地区の派遣隊のみなさん、ISTのみなさん。1週間休みをとらせてくれて私の仕事の穴を埋めてくれた会社の上司、スタッフ達。差し入れを持って現地まで遊びに来てくれた家族。本当に感謝しています。楽しかったです。一生モノの思い出です。ありがとうございました。

以上